

# 「能」は面白い！中学生・大学生とともに「能」の魅力を考える

富山敦史

"Noh" is interesting at all! With a junior high student, a university student, I thought about what the charm of the ability was.

TOMIYAMA Atsushi

2020年11月4日受理

## 抄 録

平成29年、平成30年の中学校高等学校学習指導要領の改訂をうけ、今後の国語科における古典学習は「親しむ」ということをキーワードに、小中高の系統性を図りつつ生活の中に伝統的な言語文化をいかす姿勢をもった伝統文化の担い手を育成する授業を創り出すことと規定できる。子どもたちに古典学習を通して「思考力・判断力・表現力等」を育成することが教員に課せられている状況の中で「学ぶ意味がわからない」「つまらない、退屈だ」と児童生徒に感じさせない魅力的な伝統的な言語文化の授業はどう構築すればよいのか。本稿では論者が中学生と大学生に対して実施した「能楽」の授業の一端を紹介し、そこに表出された生徒や学生の「能楽」「伝統文化」についての考えや議論を整理、検討し、学校教育において「能楽」を授業として扱うことが、児童生徒の古典学習に対する興味・関心を喚起する「魅力ある」授業構築のヒントとなる大きな可能性があることを示した。

キーワード：学習指導要領、我が国の伝統的な言語文化、能楽、謡、古典の魅力

## はじめに

平成29年告示の小学校および中学校学習指導要領に先立つ「中央教育審議会答申（以下中教審答申）」（平成28年12月21日）では、次のように述べられている。

現行の学習指導要領では、国語科においても我が国や郷土が育んできた伝統文化に関する教育を充実したところであるが、引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。（下線は論者、以下同じ）

これは、小中高の系統性を重視しつつ、伝統文化の担い手を育成することを述べている。この答申を踏まえた学習指導要領（平成 29 年告示）では、国語科の目標(3)に、

(3)言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

と示されている。ここでは、まず「言葉がもつ価値を認識すること」が示され、次に「言語感覚を豊かにすること」、「我が国の言語文化に関わること」の2つを行動目標にし、そのことを通じて「国語を尊重」し、国語を尊重する能力の向上を図る態度を養うと示されている。最終的に目標にすべきことは「態度を養うこと」であり、具体的な能力を明示してはいない。この部分の解説では「関わること」に関して、

我が国の言語文化に関わるとは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などに関わることである。

と、「多様な言語芸術や芸能」などに関わることを示されている。「多様な言語芸術や芸能」とあるが、教員や子どもたちは、具体的にどんなものを思い浮かべるであろうか。また、どんなものに「関わること」が想定されているのだろうか。次に国語科の内容においては、あくまで「伝統的な言語文化に親しむこと」としたうえで、以下のように述べる。

小学校での学習を踏まえ、中学校においても引き続き親しむことを重視し、その表現を味わったり、自らの表現に生かしたりすることに重点を置いて内容を構成している。各学年のアは、音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむことを系統的に示している。各学年のイは、第1学年では、古典には様々な種類の作品があることを知ることを、第2学年では、古典に表れたものの方見方や考え方を知ることを、第3学年では、長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うことを示している。

一方、平成 30 年告示の高等学校学習指導要領に先立つ、「中教審答申」では、

高等学校の国語教育においては、〈中略〉古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題とし

て指摘されている。

と、述べられ新しい「古典」に関する科目「言語文化」「古典探究」の設定に関して、

○「言語文化」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究」を設定する。

○選択科目「古典探究」は、古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として、主に古文・漢文を教材に、「伝統的な言語文化に関する理解」を深めることを重視するとともに、「思考力・判断力・表現力等」を育成する。

と、「伝統的な言語文化に関する理解」をより深める科目であることを示している。

以上を総括すれば、「親しむ」ということをキーワードにして、小中（高）の系統性を図りつつ、生活の中に伝統的な言語文化をいかす姿勢をもった伝統文化の担い手を育成する授業を創り出すこと、加えてその根底には「古典」学習を通じた「思考力・判断力・表現力等」の育成が教員に課せられているといえよう。「学ぶ意味がわからない」「つまらないなあ」「退屈だな」「嫌だ、苦手だ」などと児童生徒に感じさせない魅力的な伝統的な言語文化の授業は、どのようにつくっていけばよいのだろうか。

本稿では、中学生と大学生に対して実施した「能楽」の授業の一端を紹介し、学校教育において「能楽」を授業として扱う際に、児童生徒の興味・関心を喚起する「魅力ある」授業構築の鍵を探ることを目標とする。

## 1. 能楽の授業「謡」の試み（中学生）

### 1.1. 能『高砂』『待謡（まちうたい）』を謡う

能楽とは能と狂言を合わせていう言葉である。狂言は小学校教科書に掲載されているが、能については、文学史的記述はあるものの、教科書に本文が掲載されることは極めて少ない。中学校国語教材として能の詞章が採録されている東京書籍（平成24年度検定済教科書）所収の『高砂』『待謡』を掲げる。

**高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、  
月もろともに出て潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、  
はや住の江に着きにけり、はや住の江に着きにけり**

### 1.2. 能『高砂』『待謡』の指導の実際（1校時50分間での指導）

ここに掲出する取組は、論者が2016年12月から2017年1月にかけて奈良県内の中学校において実践したものである。

(1) テキストを読む（音読練習）5分

- ① たか さご や、このうらぶねにほをあげて、
- ② このうらぶねにほをあげて、
- ③ つきもろともにいでしおの、
- ④ なみのあわじのしまかげや、
- ⑤ とおくなるおのおきすぎて、
- ⑥ はやすみのえにつきにけり、
- ⑦ はやすみのえにつきにけり。

上記のように、黒板に①～⑦行を1行ずつ掲示または板書する。字間、行間はあとの書き込みに備えて空けておく。次に黒板掲示や板書と同様のことばを記したプリント（図1）を配布し必要に応じてメモをすることを指示しておく。まずは、「た・か・さ・ご・や・こ・の・う・ら・ぶ・ね・に・」のように、1文字ずつ、真っ直ぐ平坦な音で読む練習をする。

図1 『高砂』「待謡」

たか さご や このうらぶねにほをあげ て  
このうらぶねに ほをあげて  
つきもろともに いでしおの  
なみのあわじの しまかげや  
と お くなるおのおきすぎて  
は あ あや すみの お お えにつきにけり  
は あ あや すみのえにつきにけり

(2) 『高砂』「待謡」の意味を考える（必要に応じてプリントにメモをする）10分

平仮名のみで書かれたテキストに漢字を当てたり、意味を考え合う。次に、教員と生徒との問答の一例を示す（Tは教員、Sは生徒・学生）。

T：高砂（たかさご）とは？何でしょうか？

S：高い砂？

T：この言葉聞いたことある？

S：地名？

S：百人一首で聞いたことある、高砂の尾上の桜…。（T：関係あるかな？）

T：どこだろう？（S：神戸？、兵庫？ S：ボソボソ）

T：「うら」って何だろう？

S：表（おもて）・裏（うら）の裏？

T：高砂は今の兵庫県の高砂市、神戸よりもっと西の瀬戸内海に面した海辺の街です。

S：だったら浦、何々浦ってこと。海辺のこと。

T：ほをあげてとは？

S：「ほ」は帆、帆船の帆を上げる、張る。帆掛け船。

T：帆を張って、どうするの？

S：出発する、船出する。(T：なるほど！)

T：帆掛け舟に帆を張って出発する。いつ出発してどこに行くのだろうか？

S：「つき…」、「…出でし」とあるから、月が出る頃。

T：「もろともに」「いでしお」はどうだろうか？

S：「もろとも」は難しい。「もろともにあわれとおもへ山桜…」という和歌がある。

T：もろともは、諸共と書き、一緒にとという意味。「しお」はどう書くのかな？

S：「塩」いいや「潮」のほう。潮に乗って船出すること。黒潮とかいう。

T：月と一緒に潮に乗って船出（出発）するということかな。どこに行くのかな？

S：「なみのあわじ」って淡路島、「しまかげ」って淡路島の影が見えること。

T：高砂から淡路島を見ながら瀬戸内海を進んでいくのかな？「なるお」の沖ってどこだろう？（地図サイトで調べてみよう！）

S：「鳴尾」を調べてみると、鳴尾浜、今の兵庫県西宮市です。

T：鳴尾浜の沖を通り過ぎて、どこに行くのでしょうか？

S：「すみのえ」に着く。住之江は大阪市住之江区のことかな？

T：「すみのえ」は「住吉」とも書きます。大阪に住吉大社がありますね。その近くの住之江に着くのです。高砂には「高砂神社」に相生松（あいおいのまつ）があります。

S：兵庫県の高砂（神社）から帆掛け船に乗って大阪市の住吉大社に行くということかな。

以上の問答を経て、『高砂』『待謡』の概要を理解する。時間が確保できれば、掛詞など謡の詞章（ししょう）の表現技法についても気づかせることができれば良いと考える。

### (3)お稽古DVDを視聴しそれに合わせて練習する（必要に応じてメモする）15分

ここでは、教員対象の能楽ワークショップのお稽古（ワキ方高安流能楽師有松遼一氏の指導）の場面（15分間）を使用する。DVD視聴の際の留意点は、能楽師の音量と質が最大限に活かされるよう大きな画面と適切な音量を予め準備することである。説明のときと実演のときの能楽師の音量の差が大きいので、児童生徒の実態に合わせて、効果的に学べるように臨機応変に音量調整することが必要不可欠である。小さすぎれば謡の声の魅力を伝えることができず、大きすぎれば恐怖心を抱くことになる。必要に応じて謡い方の特徴（拍<8拍>や間、上中下の音の高さ）をプリントに書き込む。なぜそのように謡うのかなどの問いを立てて考えさせることをしてもよい。なお、ここでは「待謡」を一回うたう時間の目安を約1分としている。

### (4)教員の謡に合わせて練習する 10分

(3)の段階を終えると、謡のだいたいはうたえるようになってくる。ここで、指導す

る教員自身が謡をうたいながら、補完することで、さらに表現力が高まってくる。例えば、謡の速さや拍の伸び縮みには、うたわれている情景が関係していることを(2)で確認した意味と照らし合わせることもできる。また、詞章を手掛かりに情景をイメージすることもできる。見えないものが見えてくる瞬間が訪れる。例えば、月下、淡路島の鳥影を見つつ、鳴尾浜の沖を通り過ぎ、最後に船が住之江の港にゆっくりと着岸するときの様子などが眼前に浮かび上がってくるだろう。そして、教員が能の謡の拍(8拍)をとりながら、詞章を重ねてうたっていくと、謡の音楽性を感じ取らせることができるのも指導の魅力の一つである。これらの指導の前提には、教員自身も『高砂』「待謡」が謡えることが必須だが、プロの技には迫れなくとも教員自らも謡をうたおうとする気迫で取り組むことが重要である。伝統芸能の指導といえば専門家のアウトリーチに頼る傾向があるが、教員も生徒と共に伝統芸能と一緒に一から学んでいくという真摯な姿勢が大切であると考えられる。また共にうたうことで指導のポイントも把握することができる。

#### (5) 謡の暗誦から発表(披露)へ 10分+α

この段階までくると、ほとんどの生徒が謡の詞章のだいたいを覚えてしまっているので、クラス全体でうたったり、小グループでうたったりする練習を何度かしながら、詞章を覚えていく。一人では気づけなかったことも複数で謡を合わせることで、謡のコツ(拍子や抑揚)を掴むこともできる。指揮者をたてないで誰がどの音の高さで謡いだすのか、どのように拍と間を意識するのかなど、謡を成り立たせることについて対話的に思考を深めることができる。この段階を経ると、謡に対する抵抗感が軽減してくるとともに、複数で合わせて謡う(地謡)ときの息づかいや間の理解が深まってくる。この期を承けて、発表(披露)に取り組む。①「クラス全体」→②「グループ」→③「個人の段階」を進んでいく。発表の留意点としては、詞章を暗誦して行うことが求められるが、仲間の発表を聞いているうちに謡の詞章は覚えられてしまうのである。個人発表は、原則、授業の毎時(5分程度)継続して行った。

#### (6) 発展(謡の披露)+α(例:国際交流)

今回の取組では、生徒たちの希望により、姉妹校提携をしている韓国公州市の中学生の訪日歓迎会で披露した(第1学年全員153名、中学校小体育館、韓国側:生徒5名、教員2名)。生徒たちは『高砂』の謡に込められた清新な出会いの気持ちと末永く交流を続けたいという思いを込めて謡った。謡を聞いた韓国の生徒は、「はじめ『お経』のような印象を受けたが、次第にその調べに引き込まれていった」という感想を述べていた。意味が分からなくても「思い(想い)」が伝わることを生徒たちは実感したようであった。

### 1.3. 『高砂』「待謡」を謡っての振り返り(生徒のつぶやき、「感想文集」から)

#### (1) つぶやき(口頭)

##### 【自己評価・感想】

- ・声の出し方は難しいが謡ってみたら楽しかった。

- ・やってみると思ったより簡単だった。
- ・本物の謡に近づけるようになりたい。

#### 【稽古】

- ・音の強弱、抑揚、伸ばす所が難しいが一緒に稽古して楽しくなった。
- ・段階を追って、ゆっくり稽古したので難しい所のコツが少しずつ学べた。
- ・初めは難しかったがどんどんやっていくうちに謡い方がわかり謡えるようになった。
- ・先生が、声を上げる所の一つ一つを丁寧に指導してくださったので、よく理解することができた。

#### 【課題】

- ・息の継ぎ方が難しい。
- ・芯のある大きな声を出すのが難しい。
- ・上がり下がりの音程をとるのが難しい。
- ・大きな声が出せない。

#### 【発見】

- ・謡は、「歌」と「音読」の間みたいで楽しかった。
- ・狂言とは違う謡で新しかった。
- ・細かいコツがあることで様々な表現ができることに気づいた。
- ・身振り手振りをすると自然に声が調子を合わせてくれるし、気持ちも込めやすい。
- ・しっかり聴いてみて素晴らしさが伝わってきた。

#### (2)振り返り（ノートの記述から）

##### ①動画練習

- ・動画を見て、「今のところは声を震わせた方がいいな」、「この部分はそうやって音を出すんだ」など、自分でどこをどうすることでよりよい謡ができるかなどを考えるようになりました。
- ・学校で本当に謡っているDVDを見て、格好いいし、体に響き渡るようで「ゾクッ」としました。自分もそんなふうになりたいと思ったので家で練習しました。

##### ②グループ練習・聴き合い

- ・学校で休み時間に友達で互いに聞いてもらってアドバイスとかをしているうちに、自分の中でうまくなってきたという実感も湧いてきました。
- ・自分もまねをしてぬすんでいきました。

他の人の謡を聞いて、声が低ければ低いほど本物の能の感じがでるなぁと思いました。せっかく覚えたのだから日本人として一生覚えておこうと感じました。

- ・僕が謡うとき以外にも、他の人の謡をたくさん聞きましたが、みんな大きな声を出すことができている、女子も女子ならではの声で「高砂」を謡うことが上手にできていました。

・違うクラスの子の謡を聞いたり、同じクラスの子の謡を聞いたりしていると、私にはできていない上手な謡い方がたくさんありました。例えば、口を大きく開けるなど

のことです。

### ③全体練習・全体発表

・クラス全員で「高砂」を謡ったときは、他の人の謡が聞けるので、刺激を受けてもっとこうしようとしていきました。

### ④個人練習・個人発表

・僕は謡うときには大きい声を出すということを意識して謡いました。なぜなら、最初の部分は出発のところなので、大きい声で謡うと舟を押すような感じなので良いと思ったからです

・みんなの前で発表するときは緊張とかはしたけれど、謡っていて、とても面白いと思ったし、“こういうのが楽しいから舞台に出演してはるんだ”と思いました。

・聞けば聞くほど興味を持つことができ、もっともっと謡が上手になりたいと思えた。みんなの前で発表するとき、最初、震えて失敗してしまったことが、僕に火をつけてくれたので、もっともっと練習することができた。

・動画などを見て、特に最後の「はぁ～アや、すみのえにつきにけ～り～」のところの音程は他人にはどう聞こえているか、自撮りもしてみました。それによって謡い方を研究し、相手に想像させるような「高砂」を謡えて良かったです。

・「高砂」の待謡を謡ってみて、今まで出したことのない声に戸惑った。例えば、「とおくなるおのおきすぎて」や、最後の「はやすみのえにつきにけり」などだ。複雑な音の上がり下がりかと思ったように声を出すのが難しかった。また、家で練習するときに、能をやっている人のように低い声を出すことができず、何度も練習すると、自然と謡えるようになった。友達の謡を聞いていると、自分に足りないところが分かったので、そこを練習した。

・みんなの前で発表するときはとても緊張して、上手に謡っていたかどうかわかりませんが、何度も謡ううちに、「嫌だ」という気持ちよりも「楽しい」という気持ちの方が大きくなっていき、「能が好きだ」と感じてきました。

### ⑤学ぶ過程を通して

・初めて能のプリントを見て謡を聞いたとき、意味がわからなかったもので、あまり興味が湧いてきませんでした。訳もわからず、二回ほど授業で聴いていると、先生が意味や謡っているときの状況を説明してくださったのでだんだんと理解はしてきました。そして、三日目にみんなの前で実際に謡ってみると、それはもう自分も楽しく謡えて、みんなからの拍手もすごかったので良かったと思いました。

気をつけたことは姿勢です。しっかりしないと声が出ないので、姿勢正しく謡いました。私は、能をやってみて良かったと思っています。なぜなら、とても気持ちが良いし、楽しいからです。

・始めは覚えるのだけでも難しく時間がかかりました。さらに一本調子になったり、伸ばすところがわからなかったり、手本通りにできなくて、あまり面白くありませんでした。しかし、プロの方のビデオを見たり、プロの方そっくりに謡う友達とかをまねしていくうちに、毎回の授業の中で少しずつ上達していったんじゃないかなと思



えるようになりました。

・「元気に謡わないと「高砂」にならないな」と思いました。腹の底から大きな声を出すというのは思っていたよりも難しく、「能」というのはとても大変だということがわかりました。授業で何度も練習し、「高砂」の謡に近づける方法を教えてもらおうと、クラス全体が最初に謡ったときよりも全然違うことに驚きました。

・実際に謡ったりすることによって、能の良さがどんどんわかってきました。また、たくさんの人の謡を聞いて、よりよく謡を謡うためにできることはたくさんあると気づきました。だから、僕は今後、実際に能を観て、より能のおもしろさ、楽しさ、良さを知っていき、実際に謡ったりしたいと思うようになりました。

・実際に謡ってみると、音の高低、強弱、ビブラートなど様々な謡い方があることに気づいたので、そういったところにも注目して能を観たいです。また、能は観る人の受け取り方を考えて舞台を作っていることも工夫されていて良いなと思いました。

・「高砂」の謡をやってみてすごく楽しかったです。理由は自分なりに音程も変えられるし、リズムなどをとるのは難しいけれど、そこがやり甲斐があって良かったです。

#### ⑥能への興味・関心・感想

##### 【はじめ】

・僕が初めて「高砂」を聞いたときは、独特で変で、笑いそうになってしまった。僕は、「能」の謡を謡って、今まで感じたことのないような気持ちを味わいました。

・「能」の勉強をするまでは、「能」に一切興味がなかったですが、世界遺産にもなった能の謡を初めて聞き、初めて謡って、とても心地良い気持ちになりました。

・初めて「高砂」の謡を聞いたとき、今まで聞いたこともない、自分にとって未知の音楽でした。現代音楽でいうポップクラシック系などとは違う声の大小、声による謡の表現に現代音楽との違いを感じました。いざ謡ってみるものの、音程は合わない、どうしても棒読みになってしまいがちでした。

・能の謡を謡ってみて、能は面白いと思った。映像を見て、謡の練習をしていくと、西洋の音楽とは違ったメロディーやリズム、そして、今まで劇（演劇）しか見てこなかったもので、とても「新しい」と感じた。

##### 【謡ったあと】

・もっと他の謡にも挑戦しようと思いました。

・能は本物を観たいと思いました。なぜなら、能というものをしっかりわかることができ、おもしろいなあと思ったから。

・本当に実際の能などを観て、能の世界に触れてみて、日本の古典を身体で感じたいなと思っています。

・「実際に能を観てみたいです！」なぜなら、動画でも伝わってくるあの気迫を、臨場感を味わいながら体感してみたいからです。

・伝統的な能の一部（謡）を少しやったという理由から本物の「能」を観にいきたいです。

・中学生になって、プロの方の声（生じゃないけど）も聞いて、それをまねしてい

ますと、だんだん自分のものになっていって、そこから離れて、自分独自の謡い方になっていくのです。それがとても楽しかったです。

・能を学んで、実際にやってみることはすごく素晴らしいと思いますので、どうか、たくさんの学校ですっと授業をやってほしいです。

・今後も能を観たいと思います。理由は、能は見る人の想像力に委ねられる芸術なので、自分で想像するということが何倍にも世界が広がるんだということを感じたいからです。

## 2. 能楽の授業の試み（大学生）

### 2.1. 大学での取組－『高砂』『待謡』の謡と『羽衣』『東遊』

大学での取組は、A大学およびB大学において、中学校高等学校の国語科教員免許取得を目的とする「国語科教育法」の授業内で行った。内容は、まず1. で述べた中学生と同様の取組（『高砂』『待謡』を謡う）と、地元静岡三保の松原を舞台とする『羽衣』『東遊』の教材化、および発展的な教材化として「能楽」の授業構築に取組んだ。

### 2.2. A大学教育学部（注2）

#### (1)第1回目 2/13（水）の7・8校時

- ①能の鑑賞経験の有無の確認
- ②能についての知識背景の確認
- ③『高砂』『待謡』の練習（YouTube「観世流」の視聴）
- ④『羽衣』の舞台とストーリーの紹介（いや疑いは人間に有り、天に偽りなきものを）
- ⑤『高砂』『待謡』の練習（論者に合わせて練習）→宿題（練習：次回謡の発表）
- ⑥奈良教育大学附属中学校生徒の『高砂』『待謡』の発表動画視聴（生徒個人2名と153名）
- ⑦質疑応答
- ⑧まとめ（記述）

#### (2)第2回目 2/14（木）の1・2校時

- ①『高砂』『待謡』の練習（宿題の成果発表）
- ②『高砂』『待謡』（有松遼一氏の「高砂のお稽古」DVD 動画視聴：約15分）
- ③全体練習2回
- ④グループ練習1回（3分間）
- ⑤『高砂』『待謡』の発表（全体で1回：動画に収録）
- ⑥動画収録した『高砂』『待謡』の音声を聞く
- ⑦B大生の『高砂』『待謡』の収録音声を聞く
- ⑧『羽衣』（東遊び～最後）の「囃子と地謡」のみのDVD視聴
- ⑨『羽衣』（東遊び～最後）のDVD視聴

## ⑩まとめ（記述）

### 2.2.1. 学生のリフレクションペーパー（「大福帳」）から

ここでは、授業後の振り返りとして実施したリフレクションペーパー「大福帳」の記述を分類、整理して、能楽の魅力と授業構築の可能性を検討する。特に能楽の本質や魅力に関係が深い事項、授業化にあたって学習指導要領に関連する事項等は太字で示した。なお、リフレクションペーパー「大福帳」は、三重大学教育学部の織田揮準氏により1980年から90年代にかけて開発されたものであり、「学生・教員間のコミュニケーションの促進によって、教員にとっては学生の理解状況のモニターと授業改善のヒントを得ることができ、また、学生にとっては授業内容の確認や振り返り、また教員を身近に感じられ、授業に参加している感覚を強めるという効果がある」（向後2006注1）とされる。

#### (1)の⑦「第1回の質疑応答から」から

##### ◆カリキュラム

- ・この謡の体験をいかに次にどうつなげ、いかして授業を展開したのか。
- ・時間確保の問題
- ・他教科との関わり（音楽・社会）

##### ◆指導上の留意点

- ・声の高さ、男女の声の違い、声の合わせ方（音程など含む）
- ・どのような方法で中学生をやる気にしたのだろうか。

##### ◆問い

- ・なぜ能楽が世界文化遺産たり得るのだろうか。

#### (1)の⑧「まとめ記述」から

##### ◆能楽の多様性

- ・能楽の多様性を認める心を育みたい（声の出し方、男女の違い）。
- ・個性があることがわかり、それを認める姿勢が良いと感じた。
- ・多様性を認める能は、オープンエンドの問いと同じスタンスだと思う、これが重要である。
- ・自分のルーツの文化を知っておくことは、相手のルーツを知る基盤にもなるから重要である（ESD、SDGsとの関わりが示唆される）。
- ・実際に謡を謡ってみて、抑揚の付け方やリズムが難しいと感じたが、音程に決まりがないうところがそれぞれの味が出せるので素敵だと感じた。

##### ◆能楽の特徴

- ・テレビなどで見ていると何を言っているのか分からない印象であったが、自分で謡ってみると、言葉の意味がしっかりのせられているように感じた。
- ・独特のリズムと調でとても惹かれるものがあった。同じ伝統芸能の歌舞伎や狂言との違いや共通点を見ていきたいと思う。
- ・今日やってみて、少しできた感じがしたので、面白いと思った。

・普段聞いている音楽（J - P O Pや洋楽等）と違いがあり、例えばリズムでいえば能には独特な間の取り方があったり、音の高さでいえば、音階が定まってなかったりと、言葉の一つ一つを大切にしているように感じ取った。生徒にもこの特有の言葉（音）の響きやリズムを体得してほしい。

・能という長くて何を言っているかわからないイメージがあり強い興味はなかったが、短い一節（？）を取り出して発声してみると、日本語特有のイントネーションや言葉の響きの面白さが感じられた。教員を目指しているのに、伝統的な日本文化を食わず嫌いしていたなと思った。短歌や俳句、短い古典を暗唱するよりも、魅力的な文化をより体験できると思う。

#### ◆取組の形態

- ・取り組むことでクラスの雰囲気が良くなる。
- ・「全体練習」→「グループ練習」→「発表会」で楽しみながら知識・関心・文化理解が深まる。
- ・鑑賞の説明も大事だが、実際に謡ってみるのがよい。そのとき意味が分からなくても楽しければ後々生徒は調べるだろう。調べられるように提示の仕方などを工夫する必要がある。
- ・「百聞は一見に如かず」ということを超えて、「実際にやってみる」という取組は子どもたちにも身近に感じられると思った。
- ・能を見たことはあったが、実際に声に出したのは初めてで一人でやるのは少し抵抗があるかもしれないが、クラス全員やグループでやるならば楽しく能に触れることができる活動だと思った。

#### ◆カリキュラム

- ・クロスカリキュラムで、授業時間数を確保する。
- ・能が成立した時代背景を示し、なぜこのような音楽（謡）となったのかを考えることで社会科との関連も自ずと掴めていこう。
- ・「能楽」を実際にやってみて声の出し方が面白いと思った。能楽と聞くと堅苦しそうだったが、声一つで表情をつけて謡う能楽師さんに圧倒された。意味を調べる（国語）、歴史と関連づける（社会）、和楽器を使う（音楽）等と、教科横断的に学習できる教材だと思った。
- ・実際にやってみると、声の出し方や音の取り方など今まで体験したことのないやり方に違和感をもった。でも、この音の中で、言葉がリズム感よく入ってくると、よりきれいに言葉が入ってくる感覚があった。

#### ◆伝統文化

- ・教師側から積極的に伝えようとしないと伝統文化を知る機会はない。
- ・地方の伝承に基づいたものもあるので、地域理解、地元理解が深まる。
- ・我が国の伝統的な言語文化の享受・継承につながっていく取組である。
- ・新鮮な体験ができる取組である。
- ・国語の授業で能楽を取り上げるのは斬新であった。

- ・一見形式的に見えても実は呼吸で合わせることが大事であることなど日本らしいと思う。
- ・海外にはないまさに日本の伝統文化そのものなので、積極的に授業で取り上げて感じるのは素晴らしいことだ。
- ・小、中学校のうちから能に触れる機会があると、子どもに古典への興味を引き出すことができる。

#### ◆授業化への課題・留意点

- ・今はYouTubeなどで簡単にアクセスすることができるが、子どもたちの心を動かすような授業を行うことが必要だ。
- ・学習指導要領の「親しむ」だけではなく、そこから発展させなければ意味はない。
- ・能を授業で扱う際に、どんな目標、評価を設定すべきか、授業でどの程度踏み込んでいくのか、楽しいだけで実りのない授業にならないか不安である。
- ・ビデオで楽しむ（伝統文化を知る）には良いが、極めようとするには「難」がある。
- ・恥ずかしい子への対応－変声期の子どもたちへの配慮はどうするのか。
- ・学生生徒への取組は難しい。能を演じること謡うことに抵抗がある。
- ・教師がすべて指導できないので、やはり能楽師に来てもらったり、能楽堂へ行ったりするのがいい。
- ・詳しく背景を説明しておかないともったいない。いきなり謡うと、どうしてそこでそのような節回しになるか理解できない。
- ・言葉の意味がわかるか否かで声の出し方が変わる。なぜ、『高砂』の5～7段目で調子が敢えて変わるのか気になった。
- ・国語で扱うのなら、言葉の意味一つ一つも詳しく取り上げる必要があるのではないか。

#### (2)の⑩「まとめ記述」から

##### ◆動画の扱い

- ・動画の指導者の指示が具体的（手で高さを示すことなど）で分かりやすかった。
- ・有松さんの教え方がうまかったです。手で音の上がり下がり（伸ばし）を表しているのを見たり、細かく区切って練習することで、初めよりかなりできるようになり案外楽しかった。
- ・もっと細かい発音の仕方など細かいところまで観察できる動画が必要である。
- ・音声資料を用いるには音量や音質に配慮しなければならない（びっくりする子もいる）。
- ・発達段階によって伝え方を工夫すること、謡のポイントや謡の練習の進め方も分かりやすくする必要はある。
- ・能楽の謡に触れてみて、発声の独特さや声の魅力（ハリやツヤ？）を感じる事ができた。実際に声に出すことで当時の言葉遣いを体験できたが、言葉の意味やなぜそういった発音をしなければならないのかなど、文化の背景や歴史を紹介すればもっと生徒に興味をわくと思う。

・能に限らず日本の伝統芸能に親しませるためには、やはり導入が重要。「能ってカッコイイ」と思えるためには、実際の映像を見せるしかないのだろうか。もっと易しい入門の仕方はないのだろうか。

・子どものモチベーションをどう引き出すのか、効果的なビデオ活用が望まれる。

・ビデオを通じての稽古（練習）ではあったが、能楽師の方からの視点から指導、助言を受けることで、能楽そのものに対してより興味をもつことにつながった。また能楽師の方の言葉を聴いて、それと同じように自分が返すことで、単に能楽を体験するだけでなく、その世界観の中で言葉のやりとりをする「対話」をしているようにも感じられた。ある種、心のつながりという「対話」だと思う。実際に能楽をやる（うたう）ことで学びが深まると感じた。

・初めて『羽衣』の能を見て、全体としては強い緊張感があると思った。一つの手の動き、一步の動きなど細かな動作に神経を使っているのがわかり、それでリハーサルなしとは本当に凄い。

・字幕で、台詞や何の場面かなど（予備知識・注目ポイント）を記すことは、必須である。

#### ◆謡の指導

・実際に声に出して周りの人と一緒に活動することで、他の人の声を聞きながら自分の声を調整したり、手本にしたりすることができると思った。

・謡うことで日本の文化に触れられた気がした。

・ICTを有効活用できることが重要だ。

・知ること謡うことで魅力を見つける、感受性が豊かになる、視野が広がる、そして生徒の可能性、将来性が広がる。

・教師が「能楽は良いものだ」と説明するより、実際にやってみたり、本物を見たりして、何かを感じてもらえることが大切だと考えた。

・謡を実際に練習して少しだがやってみると、とても気持ちの良い感覚があった。独特の声の出し方から作り出される世界観が面白く、囃子（楽器）や舞と合わさるとより一層の雰囲気が出ていて素晴らしい文化だと思った。古典に触れる良い機会になると思う。

・「高砂」の謡を練習してみて、所々音程や節の感じがわからなくなってしまうときがあったが、「多様性を認める」を思い出して、自分らしくでいいんだと気が楽になった。実際に体験してからビデオを観ると、迫力や実力差を感じるとともに、より親近感をもって鑑賞することができた。

・意味を理解して歌い込むことによってはじめて自分のものにすることができ、リズムもつかめる。自分たちの謡っている謡と能楽師の謡を比べることでさらに上達する。

#### ◆カリキュラム

・能には、古典に興味を持つきっかけとなるだけでなく、リズム感や時代背景など、教科を超えてあらゆる学びが得られる可能性を感じた。

・国語科だけでなく、音楽科や社会科などとの組み合わせ（クロスカリキュラム）で

の活用の可能性は多岐に亘るものと考える。

- ・時間との関わり→多様な文化にもアクセス必要。
- ・国語の教科書だけを考える対象とするだけでなく、他のものにも目を向けるのは生徒に普段から考える癖をつけるにも良いと考える。オペラなどとも組めるだろう。
- ・能楽は、音楽科の位置づけだけでなく、国語科で取り扱う意義を考える必要がある。我が国の伝統的な言語文化として、言葉の美しさ、リズムの楽しさなどを学び、古典に興味を持つための良い機会だと考える。
- ・能の理解が深まった上で、子どもたちが新たな興味をもったことがあるなら、より発展的に教科の枠を越えて探究してもいいと思った。例えば能楽師に焦点をあてて、抱えている問題（後継者不足等）など、社会科との関連づけも面白いと思った。

#### ◆伝統文化、地域文化、世界遺産

- ・世界遺産であることを初めて知った。
- ・能『羽衣』が地元静岡市とゆかりがあることをしてとても興味が湧いた。
- ・日本人として特に、もっと知りたいと思った。
- ・伝統文化を知るいい機会になる（授業時間を使って見る意義がある）。
- ・能にすごく興味を持つことができた。実際に能を見ることで感じられるあの場の雰囲気、空気感を生で感じたいと思った。今までの経験から能などの日本文化に関わる授業は軽視されていた感じで、教科書に出てきたからさっと触れるようなイメージであったが、いろいろな手段で深く授業をすべきであると思った。自分が授業をするときには、日本文化を感じる、感じた思いを言葉にできる、うたで伝える、そんな授業にしたいと思った。
- ・能＝古くさいと思っていたが、実際に体験することで「尊敬」の念が生まれた。
- ・能の鑑賞料金を聞いて、文化や伝統の大切さがいわれている中、国は十分な支援をしているのだろうかと思った。他国では国を挙げてオリンピックにむけて選手を支援しているところもあります。でも日本では自分でスポンサー（企業等）を得なければならない状況を憂います。
- ・昔の人が能楽に慣れ親しんだ環境にあることは今まで知らなかった。昔にどのような場面でどのような目的で行われていたのかが分かるとより興味を引くと思う。
- ・ただ歌だけでなく、お囃子や舞がつくことで華やかになる。初めて集中して見てしまった。日本の伝統文化、美しいなと感じた。私は子ども会で浜松祭りのお囃子をやってきた。能楽との繋がりを感じた。子ども会などに入る子どもが減っているので学校で伝統文化について扱う必要が強くなってきていると思う。

#### ◆指導上の留意点

- ・正直に能には言葉で表現できない凄さや奥深さがある。しかし、これを授業で扱う必要があるのだろうか。日本の伝統文化に触れることはとても大切だと思うが、これによって子どもたちは何を学ぶのか、主体的・対話的な学びになるのか、今の自分は理解に苦しむ。
- ・この取組をするのは、学校やクラスの状況によると考える。いきなりでなくスモー

ルステップで組み立てる必要がある。

・高砂の謡の解釈も一緒にできたら面白かったと思う。海の様子なども背景として知っていたらより面白い。

・古典の授業への導入やアイスブレイク的な感覚でも活用できるのではないかと考えた。

・謡をローマ字で表記すると、もっと細かい母音の変化などが伝えられるのではと思った。

・「めでたい場面」など、「○○の場面」であるというイメージしやすい言葉をかけることで自分なりの設定を考えることができた。

・伝統文化に親しむことが大切なことは分かっているにもかかわらず実際に自分がやってみると恥ずかしさがあり、はじめはあまり声を出せなかった。しかし、やっていくうちに声を出しやすい雰囲気になったので、やはりみんなで取り組もうという意識が大切だと実感した。

・一人大きい声を出してくれる人がいるとその子にみんなについていくようにだんだんと全体の声が大きくなっていく。そういう中心を見つけることも必要なと思った。

・そろえたり、間違えたりしてもOKというオープンエンドの教材だと思う。先生がまず興味をもつこと、子どもの興味の可能性を教師は広げも狭めもできることを胸に刻んでおきたいと思った。

・授業で能を学ぶことは本当になかなかできないが、学んでいくともっともっと学びたいと思うことができる分野だと感じた。だからこそ、授業での扱い方を考えないといけない。知識だけを与えたり、その場だけの体験にならないよう「記憶に残る学習」を考えたい。

・「高砂」は短く覚えやすいため、古典の教材としてとても良い。能楽を子どもにやってもらおうと思うとき、教師自身がそれをしっかりうたい、謡を見本として見せられることが大事だと感じた。能楽は子どもにとってどこか遠い馴染みのないものであるため、どのように興味を持ってもらうのかの工夫が必要である。まずは自分自身が興味を持ち、その魅力を伝えられるように他のものも見てみたい。

・できれば生で観られれば良いなと感じた。何かを鑑賞するとき、それを鑑賞する人たちと同じ空間にいることに特別な意味があると思う。クラスでの鑑賞もクラスメートと一緒に観てはいるが、別世代の人たちと観るもの新たな発見をすることができてよいのではないと思う。おそらく国語の資料集や便覧にも参考にできる資料が載っているだろうし、グループごとに担当する能楽作品を取り上げて、他のグループに紹介する活動などを取り入れても面白そうだと感じた。

・体験すると、自分のこととして学んでいけるので興味を持ちやすくなる。ただやらせて終わりではなく、次に繋げることが重要だと思った。

#### ◆能を教育で扱う意義と価値

・これから生きる高校生に古典を教えることの意義は、時代に合わせたやり方で、その本質的な部分を自分たちなりに理解させ、何かを感じ取ってもらうことにあると



考える。

・古典教育の意義の不明確さから、時間縮小の指針がとられているようであるが、学校で行われる国語の時間に、古典に触れ、理解を深め、以後の世代へ継承すること自体をなくしてはならない。

・文化は伝承する人がいないと消えてしまうものなので、教育の中で触れて興味を持つきっかけになればよいと思う。

・芸術教科ではなく国語で能のビデオを見たり自分でやってみることは貴重な時間だと思う。すべての授業は生きていくために必要な資質に加え、豊かな人生を送るためにあると自分は考えるので、是非能楽の授業をやってみたい。

・たとえ自分が、教師自身がすごく良いと思っても、押しつけがましくならないよう、生徒がやってみたいと思えるような導入を考えて、伝統芸能が廃れてしまわないようにしたい。

#### ◆その他

- ・もっと早く能について知りたかった。
- ・能の発生や背景、形式をもっと知りたくなった。

### 2.3. B大学教育学部（注3）

B大学では、1. で述べた中学生への取組に加えて、児童生徒の古典への興味関心を喚起する方策として、静岡市三保の松原を舞台とする能『羽衣』をはじめ、「能楽」の教材化を課題とし、具体的な学習指導案や指導事例案、教材等を作成した。

#### (1) 2018年度（1コマ）

- ①能の鑑賞経験の有無の確認（「能」についてのアンケート調査の実施）
- ②能についての知識背景の確認
- ③『高砂』『待謡』の練習（YouTube「観世流」の視聴）
- ④『高砂』『待謡』の練習（授業者の謡に合わせて練習）  
→宿題（練習：次回謡の発表）
- ⑤中学校生徒の『高砂』『待謡』の発表動画視聴（個人発表数名と全員発表153名）
- ⑥質疑応答
- ⑦まとめ（記述）
- ⑧課題：「能（謡曲）」「羽衣」の教材化及び学習指導案の作成
  - ・テーマ：「能」の授業をつくるために必要なことは何か？
  - ・対象は小学校または中学校（「幼稚園」「特別支援学校（学級）」も可）
  - ・国語科の学習指導案として作成すること（児童生徒の実態・指導計画・本時案等）
  - ・テキストは、『謡曲大観』『羽衣』、『日本古典文学大系 謡曲集』『羽衣』
  - ・参考資料として、「まんが能百番」等、漫画を使った書籍の使用可
- ⑨指導事例案の作成

#### ◆小学校6年：謡曲「羽衣」に親しもうー『羽衣』『東遊』をうたうー

日本の伝統芸能である能楽の基礎知識について学習すると共に、【読むこと】(2)エ・

オの内容を中心に謡曲の音読を通して日本の言語文化に触れ、能楽に興味・関心をもつことを大きなねらいとする。謡曲「羽衣」の終結部分（「東遊の数々に〜」）を、地謡のように節を付けて音読できるようになることを目標とする。

◆中学1年：能「羽衣」の魅力を伝えようー羽衣の魅力を伝える新聞づくりー

「朝日小学生新聞伝統工芸ファイル」の記事を分析した生徒たちが、自分たちの地域にある伝統芸能謡曲「羽衣」の魅力を伝えるための新聞づくりの活動を通して、効果的な情報の整理の仕方やしし方についての工夫を学ぶことができる。（【知識及び技能】(2)情報の扱い方に関する事項(2)ーイ）・能「羽衣」の基礎知識を得た生徒が、記事にする上で中心となる内容が明確になるように構成や項目などを意識して新聞を作成することができる。（【書くこと】イ構成の検討）・学習活動を通して我が国の伝統言語文化である能に親しもうとしている。（【学びに向かう力、人間性等】）

◆中学1年：「能」の世界を知り、謡曲「羽衣」に親しもう

普段生徒が接することのない「能」の世界を学ぶことで、日本の伝統文化に対する知識をつけるとともに、古典の世界に親しむことを目標としている。能の世界がどのようなものか調べ学習をしてから「羽衣」を読む。まずは「羽衣」のマンガを読み大まかな内容を把握した後、実際に台本（詞章）を読む。

・単元目標「ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと【伝統的な言語文化】」「イ 古典には様々な種類の作品があることを知る【伝統的な言語文化】」。

◆中学2年：「能」に親しもうー謡曲『羽衣』のワキシテ対話劇、羽衣伝説比較

能『羽衣』の映像を鑑賞したり、作品を朗読したりすることを通して、作品に表れたものの見方や考え方に触れ、能の世界に親しむことができる【我が国の言語文化に関する事項ア、イ】。本やインターネットを用いて日本各地に伝わる羽衣伝説を調べることを通して、『羽衣』との共通点と相違点を比較し、『羽衣』の物語の構成や表現の効果について考えるとともに、古典作品が人々から享受され、発展を伴いながら継承されていることが理解できる【読むこと(1)エ】。

◆中学2年：能楽師講話、心情理解と劇化（ワークシート：粗筋と心情理解）

能「羽衣」に親しみ、その面白さを感じる中で、古典にあらわれたものの見方や考え方について考えたり、想像したりすることができる。能は世界無形遺産であり、室町時代から続く伝統芸能である。生徒の多くはこれまで能に触れる機会がなく、どのようなものであるかイメージもない状態である。そのため、能との出会いを大事にすることで伝統芸能や古典への印象が正の方向へ傾いていくと期待できる。そこで、導入として講師を招き、能と羽衣についての講話を行っていただく。その道のプロから直接教えていただくことで生徒に能の魅力や知識が確実に伝わると考える。

◆中学2年：能楽の魅力伝えるリーフレットづくり

能の魅力を、筋書きや舞台、表現、楽器等に注目しながら捉え、能の魅力を人に伝えるためにはどうすればよいのかを考え、その理由を適切に表現することができるようにする。2年生【書くこと】ウ「事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わる

ように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。」としている。能「羽衣」に触れながら生徒たちが能の魅力を感じられるようにする。筋書きや音楽等に注目しながら能の魅力を伝えるリーフレットを作成し、自分が魅力的だと感じた部分やその心情を相手に効果的に伝えられるように描写を工夫させる。能に触れ、リーフレットを作成する活動を通して、能がそれほど長く残されていた意義や魅力を感じ取り、能への親しみを感じるきっかけとする。

◆中学3年：三保の松原に親しみを持ち、能の表現方法の良さを実感する。

文法事項の理解・和歌（天つ風…）・歌川広重の版画（情景把握）。古典特有のリズムを味わいながら、古文を音読して古典の世界に触れることで、三保の松原に親しみを持つ。古典には様々な種類があり、その一つである能について知ること。能を現在の劇と比較しながら鑑賞し、能の表現の特徴を捉える活動、能の表現の簡素さが舞台に与える影響について考える活動【知識・技能(3)ア】、能の良さを伝える文章を書く活動【思・判・表書くウ】を行う。

◆中学3年：なぜ能は人々に受け入れられ、継承されているのだろう（『羽衣』）

－地域の祇園祭との比較と「謡ルブリック」の作成－

情報を収集し、整理することで、古典には、能という作品があり、古くから継承されてきた能の魅力を知ること（知識・技能）、地域のお祭りを継承されてきた方々に、能の文化も知ってもらうという目的に応じて、必要な材料を集め、整理し、伝える内容を検討すること（思考力・判断力・表現力等）、能の表現の仕方に慣れ親しみ、表現しようとする（学びに向かう力、人間性等）の3つを単元目標とする。能の「謡」の特徴を動画から捉え、「ルブリック評価表を作成する」→ルブリックを生徒が作成することで、評価基準を意識することができるようにする→できあがった「謡ルブリック」を参考に、謡う練習をしていく。

(2) 2019年度（2コマ）

- ①「能」についてのアンケート調査の実施
- ②『高砂』『待謡』の練習（教員による練習＋意味を考える）
- ③全体練習2回
- ④グループ練習1回（3分間）
- ⑤『高砂』『待謡』の発表（全体で1回のみ謡う：動画に収録）
- ⑥⑤で収録した動画『高砂』『待謡』の音声と2018年度収録のB大生の音声および2019年度収録のA大生の音声を聞く
- ⑦振り返り
- ⑧課題：「能楽」の原典になっている古典の授業化—生徒の興味・関心の喚起に「能楽」を用いる授業の可能性を探る—
  - ・テーマ：「能」の授業をつくるために必要なことは何か？
  - ・対象は中学校または高等学校
  - ・生徒の古典学習に対する興味・関心を喚起する教材等の作成（指導計画、学習指導案、指導事例、PowerPointによる提示資料、教材、ワークシート等）

- ・テキストは、『謡曲大観』『日本古典文学大系』等および検定済み教科書
- ・参考資料として、「まんが能百番」等、漫画を使った書籍の使用可

⑨学生の授業提案例

- ◆「羽衣」『駿河国 / 丹後国風土記』
- ◆「井筒」(『伊勢物語』・「隅田川」『伊勢物語』)
- ◆「浮舟」(『源氏物語』・「葵上」『源氏物語』)
- ◆「采女」(『大和物語』)
- ◆「船弁慶」(『平家物語』、『義経記』)
- ◆「敦盛」(『平家物語』)
- ◆「安宅」(『義経記』)
- ◆「道成寺」(『今昔物語』)
- ◆狂言「柿山伏」(各学年にふさわしい狂言教材を提案する)
  - ・小学校・・・菌(くさびら)、雞聳、棒縛など
  - ・中学校・・・朝比奈、魚説法、千鳥など、
  - ・高校生・・・右近左近、魚説法、神鳴など
- ◆「胡蝶」(『荘子』、「項羽」『史記』など中国古典由来の能)

(3) 2020 年度 (3 コマ)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため遠隔授業となり、15 回のうち 3 回のみ対面授業を実施した。

- ①「能」についてのアンケート調査の実施
- ②『高砂』『待謡』の練習(教員による練習+意味を考える)
- ③全体練習 2 回
- ④グループ練習 1 回(3 分間)当日の受講者 6 名のため全体練習とした
- ⑤『高砂』『待謡』の発表(全体で 1 回のみ謡う:動画に収録)
- ⑥⑤で収録した動画『高砂』『待謡』の音声と 2018 年度、2019 年度収録の B 大生の音声および 2019 年度収録の A 大生の音声を聞く
- ⑦中学校生徒の『高砂』『待謡』の発表動画視聴(個人発表数名と全員発表 153 名)
- ⑧能のお囃子について(教材 DVD「能は面白い!《囃子編》」を使い、小鼓、大鼓、能管、太鼓を体験する)
- ⑨質疑応答と振り返り
- ⑩課題:「能は面白い!『羽衣』」の「東遊」を謡う
  - ・テーマ:教材 DVD「能は面白い!『羽衣』」を視聴し、そこで示された段階別課題にこたえながら『羽衣』「東遊」を謡えるようになる。
  - ・教材 DVD「能は面白い!羽衣」の活用方法を検討しつつ、児童生徒の古典への興味関心を喚起する教材としての能『羽衣』の授業化を考える。
  - ・する。
- ⑪質疑応答
- ⑫議論

### 3. 学校での能楽授業の試み－興味関心を喚起するヒント

最後に、中学校高等学校国語科において、『羽衣』や広く能楽を扱う授業を考える際に、生徒の興味関心を喚起しそうなトピックやエピソードを以下に示す。多岐にわたるが、古典が古代から現代に至るまで如何に享受、継承されてきたのか、教員自身も楽しんで取り組めるヒントを含んだものとして汲み取っていただければ幸いである。なお、論者が所属する「伝統音楽普及促進事業実行委員会」作成の教材DVD「能は面白い！『羽衣』」他（注4）の具体的活用については稿を改めて報告したい。

#### (1)『羽衣』そのもの

- ・古文そのものへの抵抗感を減らすための工夫（大村はまの古文読解の表記法）  
\* 古文の左右に註をつける。右に訳、左に読みを原文と対照させてつける。
- ・古文特有の助動詞の意味、用法等を取り出す→原文横の註に示す。
- ・シテとワキにわかれて、「羽衣」の対話劇をしよう。心情読解→心情表現へ
- ・「東遊～」の音読からリズムや抑揚を感じ取ろう。音読練習から「謡」の読み方へ
- ・能楽に関する知識→クイズや絵本『羽衣』（山階彌右衛門監修）の読み聞かせやクイズで

#### (2)『羽衣』と漢文との関係（能楽と漢文との関わり）

- ・霓裳羽衣曲：唐の玄宗皇帝作曲、楊貴妃、長恨歌（白居易）←杜甫、李白、安史の乱
- ・月の桂：唐・段成式『酉陽雜俎』「吳剛伐桂」月で桂を伐る男、万葉集、桂男（在原業平）
- ・漢語表現と和語表現の比較考察 ⇔ 漢籍由来の能

#### (3)和歌との関係（万葉、古今、新古今、拾遺等の和歌集との関わり）

- ・いかならばなきよとか思ふ見るからに心空なる天の羽衣（続拾遺集 恋歌 圓融院）
- ・風早のみほのうらわをこぐ舟の船人騒ぐ波立つらしも（万葉集 雑歌 羈旅）
- ・忘れずよ清見が関の波間よりかすみて見えし三保の浦松（続古今集 羈旅）
- ・風むかふ雲の浮波たつと見てつりせぬ先に帰る舟人（冷泉為相集）
- ・天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まどひてゆくへ知らずも（丹後國風土記逸文）
- ・あまつ風雲のかよひ路ふきとちよをとめの姿しばしとどめむ（古今集 良岑宗貞 五節の舞姫→藤原定家編「百人一首」へ）
- ・君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらん（拾遺集 賀歌）

#### (4)能『羽衣』と『風土記』逸文の中の「羽衣」（駿河國、丹後國、近江國）の比較

- ・駿河國：漁師が羽衣を盗り夫婦となるも羽衣見つけて雲に乗り昇天、漁師も後を追って登仙。

昔有神女。自天降來，曝羽衣於松枝。漁人拾得而見之，其輕軟不可言也。所謂六銖衣乎，織女機中物乎。神女乞之，漁人不與。神女欲上天，而無羽衣，於是，遂與漁人為夫婦，蓋不得已也。其後一旦，女取羽衣乘雲而去，其漁人亦登仙云。

・近江國：天の八女が白鳥となり湖に降り立つ、伊香刀美が白犬を遣わし末の天女の天衣を盗らせ夫婦となり子ども（男2人女2人）を設ける、のち天羽衣を見つけ昇天、夫取り残され悲嘆に暮れる。

於是伊香刀美，即生感愛，不得還去。竊遣白犬，盜取天衣。得隱弟衣。（中略）伊香刀美，與天女弟女共為室家，居於此處，遂生男女。男二女二。（中略）母即搜取天羽衣，著而昇天。伊香刀美，獨守空床，唸詠不斷。

・丹後國：比治里、羽衣を老爺老婆が盗って子になって欲しいと懇願する。

天女云「凡天人之志以信爲本何多疑心不許衣裳裾」老爺答曰「多疑无信率土之常…」→老爺は羽衣を返す。その後十余年善く酒を醸し裕福になるが、突然老爺は天女を追放。その悲しみを和歌に詠む。

「阿麻能波良 布理佐兼美禮婆 加須美多智 伊幣治麻土比夫 由久幣志良受母」  
（天の原 ふり放け見れば 霞立ち 家路まどひて 行方知らずも）

→各地を放浪し奈具志に留まる（天女は結婚せず天には帰らない）。

#### (5)世界に存在する「羽衣伝説」「白鳥伝説」の比較考察（天人女房譚）

- ・君島久子「中国の羽衣伝説—その分布と系譜」藝文研究 24 1967
- ・鈴木沙都美「羽衣説話考—一日中朝に伝承される説話の比較」日本文学ノート 45 2010

#### (6)『竹取物語』との関係を扱うもの（月人としての相違点）

- ・月との関わり 能「月宮殿」「鶴亀」
- ・『竹取物語』「衣着せつる人は心異になるなり」「この衣着つる人は物お思ひなくなりなければ」→天の羽衣を着るとどうなってしまうのか？

#### (7)能楽の魅力を伝える（新聞づくり、リーフレットづくり等）

・中学校2年「【書くこと】ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫して書くこと」を目標に、面白いと感じた点、疑問点を出し合い、筋書きや表現、音楽等に注目させ、生徒が感じた能の魅力やリーフレットにまとめる。また伝える相手によって表現方法の工夫を図らせる。

・【知識及び技能】(2)情報の扱い方に関する事項のイ及び【書くこと】イ構成の検討を目標に、地域で伝統文化の継承に関わっている方々に対して、「能楽の魅力」を伝えるための新聞づくりをする。→能「羽衣」に出会い、自身が感じた魅力を他者に伝えることを目指した新聞づくりを通じて情報を整理し効果的に伝える技能を育む。

#### (8)「謡」を謡うこと

##### ①『羽衣』『東遊』を謡う

- ・情景を想像しながら大きな声で謡う「浦風にたなびきたなびく〜」天女の情景想起
- ・「謡」の披露→相互評価、自己評価
- ・「謡」の歌い方の評価活動→「謡ルーブリック」の作成（「謡」の特徴を動画から探る）

②奈良教育大附属中学校での実践（2016）：「高砂」待謡を謡う

・「心を動かす「語り」の指導についての研究—能楽の謡を中心として」富山敦史、川畑恵子、若森達哉、松川利広奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第2号、2016（奈良教育大学学術レポジトリ所収）

・「語り」で学ぶ古典学習～「能楽」「平家物語」の「語り」を通して～」富山敦史、奈良教育大学附属中学校研究紀要第43集、2014

(9)地域教材として

- ・京都：祇園祭との関わり
- ・奈良：能楽の故郷 春日若宮御祭、井筒、
- ・静岡：祇園祭（東海道・吉原宿）、歌川広重の版画作品の構図から天女の昇天を考える。

(10)その他

- ・音楽科、美術科とも関わるが「簫、笛、琴、箏篋などの楽器と舞踊」（宇治市平等院鳳凰堂雲中供養菩薩像や「源氏物語色紙絵」若菜下など）

注

1. 向後千春「大福帳は授業の何を変えたか」（2006） 2020年11月3日閲覧  
[http://kogolab.chillout.jp/paper/20060902\\_JSETken\\_paper.pdf](http://kogolab.chillout.jp/paper/20060902_JSETken_paper.pdf)
2. 「国語科教育法Ⅳ」静岡大学教育学部学校教員養成課程3年生対象（2019年2月11日～14日集中講義）
3. 「国語科教育Ⅲ」常葉大学教育学部初等教育課程4年生対象（2018～2020年度前期講義）
4. 「伝統音楽普及促進事業実行委員会」（denonhukyu@gmail.com）作成の教材DVDは、「能は面白い！『羽衣』」のほか、「DVD 能は面白い！《囃子編》」「DVD 能は面白い！」がある。

参考資料

◆静岡「伝統芸能こどもサミット」声明文（2019年8月28日 グランシップ  
<http://granship.jugem.jp/?eid=1269> 2020年11月3日閲覧）「伝統芸能こどもサミット」は、東京オリンピック静岡県文化プログラムとして2019年9月22日に開催される第2回目の「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」の関連企画としてが開催され、県内から10団体、大阪から1団体、総勢31名が集まり、取り組んでいる伝統芸能を交流し、宣言文（スローガン）を採択した。このサミットは、伝統芸能に興味関心を持つ常葉大学と静岡大学の学生によって企画運営されたものである。

◇私たちは、伝統芸能を継承していくために、正しく習い、多くの舞台に積極的に立ち、お客さんを巻き込んで伝えていきます。

◇私たちは、伝統芸能の楽しさを伝えるために、VRなどSNSを使って活動の宣伝をします。

- ◇私たちは、伝統芸能を途絶えさせないために、お祭や伝統芸能の行事に積極的に参加します。
- ◇私たちは、伝統芸能をより多くの人に知ってもらうために、楽しいことも大変なことも、みんなに体験してもらいます。

### 謝辞

世界に誇る日本の伝統芸能である「能楽」の魅力と学校での授業の可能性について、謡やお道具（楽器）の体験を通して、真剣に考え、議論し、児童生徒が古典学習に対して、興味関心を喚起できる授業内容の提案をしてくださった常葉大学「国語科教育Ⅲ」、静岡大学「国語科教育法Ⅳ」の受講生の皆さんに御礼申し上げます。また学校における「能楽」授業のきっかけを私に与えてくださった奈良教育大学附属中学校の2017年度卒業生の皆さんに深く感謝致します。ありがとうございました。